

関東ブロック「教育ファーム意見交換会」の概要

- 1 日時：平成 22 年 1 月 27 日（水） 13：30～
- 2 場所：さいたま新都心合同庁舎 2 号館共用大研修室 5A
- 3 内容：

（1）話題提供

「教育ファーム・その原点に立ち返り・今後の課題を考える」

蕪木 豊 氏（元 埼玉県教育局指導部長）

～は じ め に～

・最近、気になったこと

先日の NHK のハイビジョンで、お米に関する番組が 1 週間ぐらい続いたのをご覧になった方はいらっしゃいますか？

私はその番組が放送される前日に、予告でアナウンサーが話しているのを聞きまして驚きました。番組の名前が何と、「コメ食う人々」というのです。思わず「えっ！」と思いました。日本人は米という言葉は、学術用語で、あるいは米の収穫高というような場合には使いますが、「食べる」が付くときには「お」が付くのではないかと思いました。しかもその下に「食う」というのです。「食う」という言葉は汚いですね。お米は「食べる」ですね。私は本当にびっくりしまして、かつて NHK の番組視聴委員をやっていたこともありましたから、すぐに電話をしました。NHK というのは、国民の文化をリードし、正しい言葉を示す役割を担っている所ではないか。私は食育に携わっていますが、実に残念だという話をいたしました。

それだけ、食べ物に対する意識が、国全体で低下してきているのではないかという気がいたします。これから教育ファームについて考えていくわけですが、やはりその活動の中で、子どもたちに使う言葉も非常に大事なのではないかと思います。

・皆様は、なぜ教育ファームを実践されるのか

皆様お一人お一人がいろいろな思いで教育ファームを実践されていると思いますが、今日はもう一度その原点に立ち返って、ご自身の実践を振り返る機会にさせていただければとの観点から話を進めて行きたいと思っています。

教育ファームの原点にあるもの

1 石黒忠篤氏のことばより

最初に、古い話になりますが資料集をお開きいただけますでしょうか。

石黒忠篤氏。農林関係の方はお名前を聞いたことはあると思いますが、この方は現在の八ヶ岳にある農業実践大学校の前身である八ヶ岳中央修練農場。そこの初代所長さんをなされまして、後に農林大臣になった方です。農政の神様、あるいは石黒農政と言われまして、活躍なさった方です。その方が、修練農場が昭和13年4月に開設されたときにお話しになった言葉が以前に読んだ記念誌に出ていました。私はいい言葉だなと思ひまして、これをメモしておりましたのでご紹介したいと思ひます。

・「農というのは、動植物を育てて、その仕事の道程において作物を愛育し、家畜を愛撫してやっていく。その農という行為において天地の自然に教えられる。生物の愛育ということに自ら人間が教えられる。これは非常に大きいと思ひます。」

・「今日の学校教育は、口で学説を説き、目で学理を読み、多数の生徒を大量生産する場所である。近世ヨーロッパ風の教育方法で欠けていることは、生徒が反復自習することによって自分で自得する方法を取らないことにある。

現在の学校教育の最も大きな欠陥を補うためには、教育の目的で最も大きなものである人間をつくるという真剣な態度で農業労働をやらねばならない。」

また、この学校の教育理念については、

この学校（修練農場）の教育理念から

・「農の本質は、生命ある生物を自然の摂理と調和し、風土に順応して、同じ生命のある人間が育て上げる。人間を含めて（生態環境の中で）自然生態系を基本として、動植物を育てるといふ農業観を自得させる。そのために、実習的訓練を通じ、農業技術・経営能力を練磨し、精神を陶冶し、農村の中堅となる農民を養成することにある」

という言葉が出ています。

古い言葉ですから、硬いところもありますが、農を通じての人間づくりということで、今日でも十分通用する言葉ではないかと思ひます。こんなところに農業教育あるいは教育ファームを行っていく場合の基本的な姿勢が、示されているのではないかということでご紹介を致しました。

2 農の持つ教育力について

では、皆様も十分ご承知だと思いますが、あらためて農の持つ教育力につきまして考えていきたいと思えます。石黒さんは「農は人をつくる」と言われましたが、どうしてでしょうか。農には多面的機能があると言われていますが、私は三つの観点 栽培・飼育、自然、文化的な面、からその教育力を考えてみました。

(1) 栽培・飼育を通じて得られるもの

1つ目は、動・植物という生命体を対象として、水やえさ、肥料などを与えることを通じて、命を見つめて、命あるものを慈しむ態度を養う。これが一番大きなものではないかと思えます。それから2つ目、手をかけ汗をかき、世話をしてやる。手を抜くと枯れたり死んでしまう。地道に努力することの大切さを知って、今の子どもたちに勤労の精神や責任感を涵養する。3つ目は、いろいろな生育の過程を予測することによって、病気や安全性への配慮を通じて、探究心とか創造力、課題解決能力等が培われる。4つ目、生命体は単に科学性とか法則性だけではなく、神秘性を有する。そういうことを体感させて、豊かな創造力を育むということがあるのではないかと思えます。ここが他の学習などと大きく違うところと思えます。5つ目、道具の使い方、扱い方、力の入れ方や危険の回避、効率的な方法など、物事を工夫する態度を養う。なかなか今の子どもたちは鉛筆も削らなくなってしまっていて、非常に不器用になってきています。

(2) 自然とのかかわりから得られるもの

1つ目は光とか水とか、自然環境への関心を深める。2つ目、メダカ・カエル・トンボ、そういった小さな生物、あるいは微生物などの生命体や土への関心が生まれる。3つ目、草花や樹木などへの関心が生まれ、細やかな心が育つ。4つ目、土や緑に接したり大気に触れることによって、四季折々の季節感を味わう。なかなか都会にいとそういうことを味わうことの出来る子どもたちが少なくなってしまうと思いますが、空や雲の動きなどに対する関心が生まれてくる。あるいは5つ目、自然を体験することによって、心に潤いや安らぎをもたらして、生徒の表情も豊かになる。

(3) 文化的な面から得られるもの

いろいろあろうかと思えますけども、1つ目、都会では味わえない農業とか農村、あるいは農家への関心が湧いてくる。2つ目、農村の景観に接することにより、心の安らぎ感を醸成して、関心を持つようになる。3つ目、健康・安全などへの関心を通じて、自分の暮らしというものをもう一回見つめ直し、食物の大切さを感じるようになる。4つ目、食物

の保存方法や加工、貯蔵、特に日本で優れている醸造技術、こういったものの素晴らしさを知る。5つ目、農村に古くから伝わる知恵を学ぶ。6つ目、わが国の食料問題だけではなく、それを考える中で、世界の食糧事情も考えるようになり、国際理解への関心も高まる。7つ目、それからやはり何といても、仲間と協力して共同して働くことの意義を感じる。

そんなことが子どもたちを育む大きなポイントになってくるのではないかと思います。まだまだこれ以外にもあるかと思います。皆さんでこれにプラスして、またいろいろな意義をお考えになっていただければと思っています。

このように、農はさまざまなものを与えてくれ、まさにこれが「農の持つ教育力」だと言われているのではないかと思います。昔の人はよく「**稲のことは稲に聴け**」と、農業を真剣に勉強しようと思うなら、「**作物の栽培は作物に聴け**」と、あるいは「**養鶏の勉強ニワトリに聴け**」と、よく言われてきました。それから「**作物は人の足音を聞いて育つ**」とも言われ、手を尽くし、愛情を掛けるということが大事だということが教えられてきました。

短時間の教育ファームでは、これを十分に身に付けることは出来ませんが、思いは同じだろうと思います。**農業とは、もの（生命）を育て、新たな価値を生み出す仕事**であるということを感じさせることが大事であると思います。期待と不安、そこには成就感と挫折感もあり、そういう中からの忍耐力や失敗してももう一度頑張ろうとするチャレンジ精神、知恵をしばらく工夫をするというようなことが、心を育てていくことになるのではないかと。何よりも**命の大切さとか思いやり、優しさ**、そんなことが人の心を鍛え、心を育てていく。まさに人間的な力、人間性を呼び起こす。それが農の持つ最大の教育力ではないかと思えます。いま、皆様方はそういう意味のある活動のお仕事をなされているということです。

時間がないので、資料のほうをざっと見ていきたいと思っています。

3 農業体験活動の優れた点

体験活動というのは、「**なすことを通じて学ぶ**」ということが特徴です。20世紀後半に出た科学技術書のベストセラーと言われる『沈黙の春』を書いたアメリカの海洋生物学者レイチェル・カーソンは、幼い時から自然に触れることは非常に大切であるということを、『センス・オブ・ワンダー』で述べていますが、自然体験には散策したり植物観察をしたり、ネイチャーゲームをしたりという単に自然に触れるだけではなくさまざまな活動があります。

(1) 農業体験活動というのは、その自然に働きかけてものを作るという具体的な直接体験を通じて、物事の見方とか感じ方とか考え方を豊かに発達させることができる活動です。単なる自然体験活動とは全く違う、極めて能動的な自然体験活動であります。そこに農業体験活動の素晴らしさがあると思います。

(2) 対象となるものに体全体の感覚すべて、五感を使って働きかける。そしていろいろなやりかた・方法を会得する。自分で体得したものというのは、確かな実感がわきます。ですから、自分に対して自信を持つことができるようになる。いまの子どもたちは実体験が少ないですからとかく、確とした自信を持つことができない子どもたちが多いわけです。物事を「やったー！」という成就感。これをしっかりと実感をもって感じさせるのは農業体験で、そこに素晴らしさがあるのではないかと思います。

(3) 自ら課題を立てて粘り強く探求する心。あるいは筋道を立てて先を見通す力を身に付けることができるようになります。

(4) 何よりも働くということ、あるいはものを生産するということ、そしてそれを通じて生きるということについて考えをめぐらせることができるようになる。いま、キャリアガイダンス、キャリア教育が中学校を中心として盛んに言われていますが、農をやるということは、そういった意味でも、生きること、そして自分がこれからどうやって生活をしていくかということを考えさせる上では、非常に意義があるのではないかと思います。

(5) 仲間とともにやる活動を通じて、共感し合う。そうした協働する喜びを体験できると思います。

(6) そして何よりも、先ほども申しましたが、農家の方々との出会いによって、物事の見方、ふるさとの言い伝えなど、さまざまな知恵を学ぶことができます。そして新たな絆も生まれてきます。いまの子どもたちは非常に体験不足で、いろいろな方と、さまざまな年代の方や職業の方と出会うという機会が、核家族化の中で非常に少なくなっています。ですから、子どもたちにとっては直接農家の方々のお話を聞くという体験は、非常に新鮮なことではないかと思います。

4 「生きる力」とは

いま、ご案内のように「生きる力」をつけるということが学校教育の目標になっております。その定義を見ますと、

1番最初に出てくるのが「基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、

自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力」と言うのです。一口に課題解決能力と言っています。2番目が、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」。これは「豊かな人間性」と言われています。それから3番目、「たくましく生きるための健康や体力」。

これは平成8年7月の中央教育審議会答申で今後の教育の基本方針として示され、今度改定された新しい学習指導要領もこれを受け継いで、これが学校の教育の目標であると言われてます。

私はこれを読んで感じますことは、これは順序が逆じゃないかと思っています。やはり人間が生きていくためには、まずは、たくましく生きるための体づくり、あるいは2番目の心、これが非常に大事ではないかと思います。

私はかねてからこのことにつきましては、「生きる力」の基本は、「心と体のスタミナづくり」であるとしています。いまちょっとしたことでもへこたれてしまう。あるいは命を絶ってしまう子もいます。丈夫な心や体をつくるのが大事です。そういうスタミナをつくるということが、生きる力のまず基本ではないかと思います。野動物の生きる力は、えさを取ることに、身を守ることに、それからコミュニケーションを取る力、これがなければ野生動物は生きていけないと言われますけれども、やはり人間も動物ですから、まず心と体をきちんとして、社会の中で力強く生きていけるスタミナをつくるのが一番大事ではないかと、常々主張してきております。

5 農業体験活動の目指すもの

(1) 子どもたちの人間的な力、人間性を育てていくためには何が大切か。私は究極の目標は、子どもたちの感性を呼び起こすこと。これが特に大切ではないかと思っております。

感性というのはどういうものか。ここに書いておきましたけども、ものごとを感じる力ですね。感情のきらめきです。「ああ、いいなあ」、「美しいなあ」、「素晴らしいなあ」と感じる、感動する心。どうして感じるか。五感によって対象から心が揺り動かされる。そしてその良さ、美しさ、価値とか心情に気づく力。そういう価値を認識する、ものごとを認識する力、これが感性ではないかと考えます。

次のページをご覧ください。ものごとは五感などを通じて、まず左の図ですが、対象物となるものごとがあります。それを五感を通じて情報をキャッチして、そして心で感ずるわけです。右のほうの図は、これは『バカの壁』という本を書いた脳科学者の養老猛氏の考

え方を、私の中でまとめたものですが、何かと出会うと感性が、いま申しあげましたように揺り動く。そうすると脳が働いて、ではそれをしっかり確かめようという行動ができてきます。そしてまたそこで新たな出会いがあって、感性がまた働いていくという循環、コイルのようなループ状のような活動を絶えず繰り返すことによって、脳は発達するという話を聞いたことがあります。

行動の方から感性のほうにねじれの矢印がありますけども、その間のちょうど真中に「出会い」と書いてください。物との出会いがあって、感性で(五感)でそれを受け止めて、「あ、いいなあ」と感じます。そうすると、今度は「なぜだろう」というふうにして、脳が働くようになって、学習のプログラムが働きます。考えたり調べたりしていきます。さらに、調べたことについて確かめてみようという意欲が湧き、行動するようになっていきます。骨格筋が働いて、実際に体が動き、行動します。そこでまた人と出会ったり、ものと出会ったりすることによって、またさらに感性が高められていく。このループ状の活動を絶えず絶えず繰り返していくことが脳を刺激します。ですからいま学力向上が大きな課題になっていますが、単に学力の増進ということで、ただ勉強をさせればいいのではなく、感性というのは脳の入口でこれを働かせることが大切であると、先生は非常に強調しておられました。

(2) 人間の認識能力というのは、細かく哲学的に言えばいろいろありますが、大きく分けて2つあります。理性的認識と感性的認識です。理性的認識というのは、主に言葉を通じて得る学問知です。学問的にものごとを知っていく。それに対して感性的な認識というのは、直感を通じてものごとを認識する。ギリシャ以来、特にこれまでの学校教育というのはどちらを重視してきたかという、この理性的認識の能力です。これを高めること、論理的思考を重視することに価値があるというふうに言われてきました。しかし、いまどうでしょうか。忘れられてきた感性をもっともっと研ぎ澄ます、そういう教育がいまこそ必要なのではないのでしょうか。

(3) ただ、理性と感性は対立するものではないと言われていました。いまもお話ししましたように、感ずることによって次の活動が、脳が活発に冴えてきます。それによって知が高まることになり、このことは連動しているわけです。禅の大家の鈴木大拙氏は、「知は感性そのものに存在する」として、「理性がつくり出した知ではなくて、感性の実感に納得を与える知は本当の力ある知である」と言っています。そう考えると、理性によっていまの社会は合理的にできておりますけども、もう少し感性的な面で人を育てるということが、

必要ではないだろうかというふうに考えます。

(4) 感性が豊かになりますと、どういうことになるかと言いますと、情緒が安定し、知的好奇心があふれてきます。美しいもの、崇高なものに感動したり、ものごとを慈しむ心や優しさが出てきます。それから勘やひらめきが出てきます。直観力ですね。バランス感覚が身に付いてきます。そして創造性とか探究心が生まれてくる。感性が豊かになるということはこういうことであると思います。農業体験学習は、それを育む上では非常に有効な活動ではないかと考えます。

教育ファームとは

1 教育の場であるということ

さて、レジュメの方にもう一度戻っていただきまして、1枚目の下の方をご覧ください。

(1) それでは**教育ファーム**とは何でしょうか。定義は示されていますので省略しますが、簡単に言えば、観光農園ではないということです。フランスでは教育ファームの運動がグリーンツーリズムとともに非常に盛んですが、向こうの文献によりますと、教育ファームは教育の場であるということが、いたる所に出てきて強調されています。

では、教育とは何か。教育というのは、意図的な営みです。ある意図をもって人を指導していく。そのためには、目的と目標をきちんと定めていく必要があります。目的というのは、皆様方一人一人が、なぜ教育ファームを行うのか。目標というのは、そのために具体的に何をなそうとするのか、どの程度までしようとするか。それはその時々の子どもの年齢の違いや経験などの違いによっても、異なってくるでしょう。教育活動には、このことを絶えず頭の中に描いていく必要があります。

(2) では皆さんは**指導者**としてどんなことを心掛けていったらいいのでしょうか。教育ファームでは皆さんは教育者です。そこでは教える者と教えられる者との間に、信頼関係がなければ駄目です。それはフランス語で「ラポール (rapport)」と言います。ラポール、つまり心の架け橋です。お互いの心の交流がなければ、どんなにリーダーが子どもたちに話をして、それは通じません。教育ファームで子どもたちに指導されるときには、このラポールということ、どこか片隅に絶えず考えていただければと思います。信頼関係、心の交流です。その信頼関係を得るためには、やはり指導者の人間性といえますか、誠実さとか真剣さとか情熱ということが必要で、子どもたちは見てわかります。わたしたちのためにこれだけやってくれるという思いがあれば、尊敬するようになります。話を聞

くようになります。そうしたことが大事だということをもう一度再確認していただきたいと思います。

体験をより確かなものに、子どもたちにしていくためには、信頼関係の上に立って、子どもたちとただ黙々とやるだけではなく、ぜひ対話をしてください。**言葉を掛けてください**。これが非常に大事です。教育ファームで農家へ行ったけど、農家のおじさんとはほとんど話さないで、ただ話を聞いて作業しただけで帰って来てしまったというのでは、これは本当の教育ファームではありません。観光農園で十分です。

そういう言葉掛けをしていく中で、どんな点に注意したらいいかと申しますと、1つは**発問**です。「これはどうなっている?」「これはどうなると思う?」「何色ですか?」そして子どもたちに考えさせ、答えさせる。この発問ということが非常に大切です。何でもかんでも説明して、手取り足取りというようなかたちで教えるのではなくて、自ら考えさせて自分でやらせる。

それから2つ目は**共感**です。出来上がったとき、「あ、よかったね」「面白かったね」「本当に綺麗だね」という共感の言葉掛けです。

3つ目は**振り返り**です。何か作業をやって行い放しにしないで、投げかけが必要です。振り返ることによりもう一度思い返しをする中で体験したことが定着します。「今日、やってどうだった?」「あなたはどう感じましたか?」必ず終わったときにみんなの前で何人かに聞いてみる。そうすると、「僕はこうだった」「私はこう感じた」と答えが帰ってきます。それをまた友達が聞いて、共感したり、あ、ほかの人はこう感じたんだということで、感じ方の勉強にもなりますし、友達の理解にもつながります。人それぞれさまざまな感じ方があることを知り人間勉強につながります。ですからこの振り返りというのは、さまざまな場でやっていく必要があると思います。

今後の課題について

1 学校へのアプローチ

よく皆さんから、学校へ入っていくのがなかなか難しいとお聞きします。そうですね。学校は急に行っても、もうすでにカリキュラムができていますから、あるいは組織もできていますから、なかなか新たな仕事を持ち出されても直ぐの対応は難しいです。どなたを訪ねたらよいかとよく聞かれますが、まずはやはり学校に行くのであれば、校長先生、教頭先生のところへ行って相談するのが一番いいと思います。あるいは学年主任の先生とか

担任の先生を通じて、あるいは、技術・家庭科の先生、養護教諭の先生方を通じてということもあるかと思います。それから、教育委員会へ行って相談することも有効です。学校教育課とか指導課とかという学校を指導、管理する課があります。そこへ行って相談する。こういう学校でこういうことを提案してみたいと思うのですがと話してみる。そこから学校へ話をもちかけていただくとよいと思います。あるいはまた保護者の方から、PTAの役員を巻き込んでというようなことで実践している学校もあります。いずれにしましても、学校はかなり早い時期に来年度の方向性や計画の検討が始まりますから、時期的には9月あるいは10月ぐらいから提案し始めていくのがいいのではと思います。

2 中学生にぜひ農業体験の機会を

昨年度の教育ファームの実証地区は139地区ありますけども、中学校をそのものを対象とした所は5団体です。対象者のなかに中学生が入っている所を含めると12団体ぐらいあります。それから本年度の21年度は117地区の中で、中学校を対象としているのは4団体です。中学生を含んでいるのを入れると10団体ぐらいです。

なぜ中学生にと言いますと、小学校では農業体験を実施している学校は、バケツ稲を含めると約8割やっています。中学校はどういう統計を取りましても、大体3割から3割5分程度です。いま一番、小・中・高を通じまして問題を抱えているのは中学生です。子どもから大人への移行期で、心の振幅の激しい時期にあり、非常に先生方も指導に苦労しています。こういう時期の子どもたち、自分のことについて考えはじめる中学生にぜひ農業体験をさせたいと思います。いま中学校では全国で職場体験が行われていますが、時間がないので申し上げられませんが、その中で農家へ行くということは非常に少ないです。小学生と異なり、単なる主観的な、「ああ、よかった」というだけではなく、自分との関係でものごとを考えられるようになってくる中学生を、ぜひ教育ファームの活動に巻き込んでいただきたいと思います。先ほどお話ししてきた「農の持つ教育力」が必ず生きてくると思います。

3 中学校「新学習指導要領」から

学習指導要領が改定されまして、技術・家庭科の技術の中に「生物育成に関する技術」というのが入り必修になりました。今まで「作物の栽培」というのは学校選択だったのですが、今度は「生物育成に関する技術」とされ必修になりました。技術科の先生の多くは工業技術をやる先生が多いのです。農をやられる方はほとんど少ないです。ですから早急に研修が必要ですが、この取組が遅れています。できるだけこの中学校の技術家庭の

先生に話を掛けるのも、有効ではないかなと思います。

4 人の輪を広げる

教育ファームを今後広げていくためには、やはり皆さん自身のサポーターを増やすということ。参加者の中で手伝ってくださる方々をお願いする。それからいろいろな機関とのネットワークを結ぶということ。これはもう皆さん方も十分ご承知だろうと思いますが行政、学校、生産者団体、他の教育ファーム・実践農家等との連携を密にする。それからもう一つは、皆さんご自身がこういった教育ファームのパイオニアでございます。ぜひ仲間を増やして、後に続く農家を開拓していただきたいと思います。

～ む す び ～

資料の最後で触れましたように、これからの社会の目標としては、**持続可能な開発**ということが人類共通の目標と言われています。いま、将来の人間が生きていけるような、未来を標榜でき、思いを馳せられる人間づくりが求められています。そうした面からも、やはり教育ファームの仕事というのは、非常に価値のある仕事であると思います。

まとめといたしまして、教育ファームの活動とは、子どもを含めまして人々に、**農の価値に気づかせること**。これが教育ファームの大きな活動のポイントではないかと思います。また、この後の時間で、皆様との意見交換の中でお話しする機会があるかと思っておりますので、時間が延びてしまい失礼しましたが、これで終わりとさせていただきます。

(2) 教育ファーム取組事例報告

夢ひたちファームなか里 代表 梶山 明子 氏

私たちは今年から教育ファームに取り組んでいますが、平成9年から地域の活性化のための活動をしてきました。今日は、自分たちのパンフレットと雑誌で取材に受けた資料をお付けしています。

私たちは、教育ファームより先に地域の活性化の活動を平成9年から行ってきました。その頃から農業が地域の活性化につながり、また、農業が子どもたちの食育にもつながると、常々思っていました。私たちの行った活動は教育ファーム、農業体験と日立市で行っている職業探検少年団の中の農業の部門も引き受けております。

私たちの仲間は女性7人だけです。加工等にも携わっており、子どもたちが種をまく、育てる、そして収穫したものを自分たちで食べる。加工する、もしくはそれを商品化する

という体験はできると思います。

昔は学校で農繁休暇と言いまして、お休みを頂いてうちの手伝いをするということもありました。今はそういうことがないですよ。農家の子どもであっても農業を手伝わない、そういう子たちが多いです。そこで平成 18 年に、わたしたちは日立市の一部の中学 1 年生の「豊かな心の教育」という事業で農業体験の受け入れをしております。その中で、子どもたちは野菜を嫌いとか、初めてこのようなものを見たとか、トウモロコシをまくときには、この種がトウモロコシだということもわからない。どうなって大きくなるということもわからないという子供がいます。

農業を体験しながら、作物を育てること、食べること。食べるときには、自分たちの好きなものだけを食べるだけでなく、嫌いな物も工夫して食べれるようにと思いピザの窯を作って食育の体験もしています。子供たちは野菜が嫌い、タマネギが嫌いと言いましても、今まで大人から子供まで約 500 人ぐらいピザ体験をしてきましたけど、大人から子どもまでピザ体験をしてきましたけど、その中でタマネギや野菜を食べれない子は、ほんの数人でした。育てたもの使って料理するときに、子どもたちも関心を持つような作り方を指導していけば、子どももきっと好き嫌いがなくなるんじゃないかなと思いつつながら、わたしたちは地域の伝統料理とか、地域につながっている昔からの食べ物、食べ方、そういうことも一緒に学んでおります。

これからも地域の活性化をしながら、育てて食べること、物を大切にすること、自然を愛することがいかに大切かを共に学びながら活動していきたいと思っております。

足利・名草ふるさと自然塾運営協議会 事務局 金坂 幸治 氏

足利・名草ふるさと自然塾運営協議会ということで、現在教育ファームに携わらせていただいております。

まず、我々が活動しております名草地区の概要でございますけれども、足利市 15 万 8,000 人の人口でございますが、その中で足利市の北部にございます。全体の面積が 19.49 平方キロメートル。人口が 2,000 人ぐらいで、世帯数が 727 世帯という地域でございます。市内でも高齢化率が非常に高くなっておりまして、現在も地域活性化ということで活動を始めているところでございます。また、23 年度には、近接地に北関東自動車道の足利インターチェンジが開設する予定になっている地域でございます。

足利・名草ふるさと自然塾とはどういう活動をしているかということですが、教

育ファームというものから始まったものではないんですが、農業を通して地域の活性化を目指すということと、自分でものを作り、参加し、体験するという、そういったレクリエーションの場を提供することを目的に活動をしております。

われわれの活動しております自然塾運営協議会についてでございますけれども、地域の住民を中心として組織をしております。足利市も一緒に入りまして、まさに協働で進めているところでございます。運営協議会が17年8月に準備会として組織をされまして、さまざまな体験プログラム、地域の整備活動、また、整備方針の検討などを行いまして、20年5月に正式に運営協議会としてスタートをしているところでございます。

運営協議会は自治会、それからNPO法人、観光協会、福祉協議会、小学校のPTA、育成会、そばの愛好会、そういった方々が入っている組織でございます。また、農業者だけの組織ではございませんで、会長は工務店を運営されておりますし、銀行員であったり、測量会社、不動産会社、会社の社長さん、いろんな方が入っております。もちろん農業者も入っておりますので、この農業体験ということも行っておりますけれども、そういったことで協議会活動を行っております。

その中で、今年度の体験プログラムとしてここに掲げてあるように、まず「田んぼの学校！」ということで稲作体験、それからもちつきとしめ縄作り、「大豆の力を学ぼう！」ということで、大豆の栽培と加工体験、「みんなでそばを育てよう！」ということで、そばの栽培、それから「里山の伝統 炭焼きを体験!」、「私だけのしいたけを作ろう!」ということで、シイタケの植菌体験、ロープを使ったツリークライミング体験、腐食したシイタケのほだ木を使ったクワガタの飼育体験、それからフラワーフェスティバルというイベント、収穫祭、そのほか地域の魅力を探る写真コンクール、そういった事業をしております。

その活動の中で、米（田んぼ）、大豆、そばの3種類が、2つ以上の作業を行っており、教育ファームの活動となっております。もちろん活動自体はその前からやっておりましたけれども、栃木農政事務所の働き掛けもございまして、教育ファームとしてなじむものだということでございましたので、教育ファームというものを推進しているところでございます。

まず「田んぼの学校!」についてご説明をさせていただきます。田んぼの学校につきましては、6月に開校式と田植えを行います。それから7月に田んぼの観察会とネイチャーゲーム、10月に手刈りで稲刈りを行います。10月に収穫したお米を5キロずつ白米にしてお配りをさせていただいております。40組の募集をかけまして、今年度は60名程度でござい

した。昨年度は 105 名の参加をいただいているところでございます。

続いて「加工編」として、お正月の準備ということで、わらを使ってしめ縄作り、それからもち米を使っておもちつきをしていただきます。参加 1,000 円で 1 回の開催ですけれども、地域の中でしめ縄作りで販売などもしておりますので、そういった地域の方の奉仕として現在行っております。もちつきにつきましても、地域で取れたもち米を使ってもちつきをしているところでございます。

続いて「大豆の力を学ぼう！」ということで、7 月に種まきと豆腐作りを行います。10 月に収穫をいたしまして、収穫された大豆を使いまして、1 月にみそ作りを行います。みそ作りは各自が 4 キログラム程度のみそを作りまして、市内でも農協さんなどが大々的に大型機械でみそを作る講習も行っておりますけれども、ここでは家庭でできるみそ作りを行っております。

続いて「そばをみんなで育てよう！」ということで、そばの栽培をしております。種まきから川の観察会、そばの収穫を行いまして、そば打ちを行っております。活動の内容はホームページを作っておりますので、インターネットの環境がございましたら、ご覧になってください。

また、今年度農林水産省の農山漁村活性化支援プロジェクト支援交付金を受けまして、活動の中心となります交流施設の建設を現在行っております。築 150 年の古い民家を移築いたしまして、そこを拠点といたしまして、今後の活動を進めていくところでございます。

S.S.C.ふれあいふぁ～む 事務局長 栗田 和巳 氏

S.S.C.ふれあいふぁ～むは群馬県の渋川市において、社団法人渋川青年会議所と 4H クラブである渋川地区農業青年クラブが共催で開催している団体になっています。お互いの理念が、渋川青年会議所は郷土を愛する人材の育成ということと、農業青年クラブとしては、地産地消推進や、農業の楽しさを伝えたいという思いから、この事業が立ち上がりました。

本年度は約 1 反歩の畑の中に、19 の参加家族に 12 m²を一区画とし割り当てこちらから提案した野菜を作ってもらう家庭菜園的なものと、参加家族全員で、いろんな野菜を作っていこうという共同畑の二つを作って、年 6 回の事業で開催しました。

まず栽培する野菜の種類に関しては、トマト・ナス・エダマメ・オクラ・トウモロコシ・コマツナ・ジャガイモ・スイカ・インゲン・ゴーヤということで、特にトマト、ナス、エ

ダマメ、トウモロコシ、スイカ、ゴーヤに関しては品種の違うものを栽培して、子どもたちにナスの品種の違いだとか、同じ品種なんだけど形が違って面白い、そういったようなことをうまく伝えられればいいなということで開催しました。

3回目には、梅雨時期の雨を想定した開催で、子ども達にレクリエーションをしてもらいその間に、保護者を対象として、農薬の適正使用推進ということで、農薬の正しい知識を伝えたり、世間を騒がせている農業についての正しい知識について農業青年が講演を行いました。簡単な資料で申し訳ないんですが、この中に、円グラフがあるんですけども、これはアンケート調査を行って集計した結果です。今度、開催される群馬県の農業青年の実績発表会に使うかなと考えています。資料のアンケート保護者というところを見ていただきますと、参加してよかったと言ってもらってる家族が大変多くて、野菜の栽培や野菜に対する意識が結構変わってきたという保護者がかなり多かったです。

文字のとおり「ふれあいふぁ～む」ということで、生産者と消費者が触れ合う、家族同士が触れ合う、他の家族とも触れ合う、そういった触れ合いを大切にして人材を育ていこうということで、他の家族とも交流ができた保護者も多く、農薬や栽培に関しても、農業の知識も豊富に経験できたのかなと、私たちは思っています。

1枚目の子どもなんですけれども、子どもに関しても、子どものほうがだいぶ素直な意見で、辛口の見解でありがたいんですけれども、自分で育てた野菜がおいしくて、トマトが嫌いだったんだけど食べられるようになったとか、そういった子どもが大変多くて、特に害虫の観察などをやったんですけども、かなり子どもは大はしゃぎという感じで、面白い観察ができたと思います。また、5回目の収穫祭では、参加家族全員で栽培したスイカでスイカ割りをしたり、バーベキューをしたりといった楽しいイベントも多かったです。

課題としては、このグラフにあるように自分たちの家族が畑を管理することに関して、畑に頻繁に足を運ばなかったという家族が多かったので、何らかのアクションを考えて、これからもより農業を理解していただき、地元の農業に関して理解をいただく、地元を愛していただくというような活動を続けていければと思います。

NPO法人オリザネット 事務局長 古谷 愛子 氏

オリザネットは、もともと自然環境を大切にしようというNPOなんですけど、その環境団体がなぜ教育ファームに取り組んでいるかというのを理解していただくための資料を作ってみました。A3の資料になります。

まず教育ファームというのを私たちは、「何らかの教育的配慮がなされている農園」という認識をしております。例えば何らかの教育的配慮というのは、農水省で取り組んでいる食育の場合であれば、食の知識や食を選択する力を習得し、健全な食生活を実践する人を育成することだし、学校教育の場合だったら、各教科の学習内容を身に付けられるなど。オリザネットが、主に取り組んできた環境教育では、環境を理解して、課題解決に向けて活動できる人を育成する。青少年育成だったら、例えば心健やかに生きる力を身に付けた人間性豊かな社会人をつくるとか、それぞれの教育活動には、独自の目的があると思うんです。教育ファームというのは、そういったそれぞれの目的を達成するために、農業体験を活用しようということだと考えています。

資料のその下なんですが、教育ファームは、農業体験をそれぞれの目的を達成する手段と考えています。例えば農作業を実践する作業手順は同じでも、それぞれ目的とする教育の種類によって、教育ファームの活動内容が異なるのではないかと考えています。その上で、時間とか場所とか予算とか参加者、いろいろな条件を考慮した上で活動内容を考えていく必要がある。目的に応じたプログラムをこだわって設計する必要があるのではないかとということです。例えば指導者の言動の例としては、作物の作り方の伝授を中心に置いたりとか、あるいは気づきを促すような発言を積極的にしていくというのは、学校教育ではすごく重要な内容になっております。あとは活動すれば気づくというよりも、環境問題とか知識を伝えないといけない問題ももちろんあると思います。あとは規律。青少年育成とか社員教育なんかでは、やる気を出させたり、礼儀正しくしたりというのも重要だと思います。

農作業の内容の例としては、例えば学校教育なんかでは、枯れちゃうようなやり方も含めて、さまざまな方法を試みる。要するに一回だけでなく、継続した活動ができる場合には有効ではないかと思えます。あるいは単発の社員教育とか青少年教育だったら、逆に規律正しく作業に取り組ませて、成功事例を体験させるということも重要ではないかと思えます。もうちょっと具体的に言うと、環境教育が入る場合には、生き物体験というのが必ず欠かせないものになってくる。また、健全な食生活推進が入る場合には、調理体験なんかは欠かせないのではないかと思えます。

右上にいけますが、食育推進基本計画の主なねらいとしては、1番から4番まで書かれています。その中にオリザネットが、環境とか生き物とかというのは直接文言としては入っていませんが、右側の矢印の先にいけますと、食育推進基本計画の中には、食への

関心、感謝の念や理解、食の大切さへの意識向上、そういったものが低下しているということがすごく指摘されているわけなんですね。それでその中に、自然の恩恵の上に貴重な食料生産が成り立っていること、食という行為は動植物の命を受け継ぐこと、そういったことを多くの人に実感してもらうことが重要というふうに、計画の中に述べられています。

実感するという事は、まさに五感を使った農作業体験により、初めて実感することができるわけで、そういった意味で、農水省も農業体験の教育ファームというのに力を入れているのではないかと考えています。

資料のまん中に書いていますが、オリザネットの理念としては、農と自然を大切に、人と生き物が共生でき、将来の世代も自然の恵みを楽しむことができる持続可能な社会づくりに貢献する。主張としては、農業や農村が多くの生き物も育んできたということを訴えていきたいと思っています。二次的自然がどういうものであるかとか、農村の役割であったりとか、生物の多様性や国産の農作物がどういうものかとか、そういったものを伝えていきたい。

実は田んぼの学校自体も今年10年目なんですけれども、それは中心的には環境教育のために田んぼの学校というのに取り組んできたんですが、実は農水省が取り組んでいる食育の内容とすごく共通点が多いので、オリザネットでは食育と環境教育を中心とした教育ファームの活動を中心に、これからも取り組んでいきたいと思っています。

実際のオリザネットで教育ファームをどうやって進めているかということなんですが、水色の部分になります。単位ごとにねらいを設定、効果確認をするということです。ねらいは、それぞれの活動ごとに知識として得てほしいこと、それから五感を通して気づいてほしいことということです。効果確認は、アンケートだけではなく、主に参加者の行動の観察とか日常会話の中で確認するようにしています。

一番右側、どういう活動をしているかということ、年間20回以上の活動なんですけれども、オリザネットのいろいろな条件の中で、目的を達成するために必要な活動、効果的な活動はどのようなものかと考えて、こういう一連の流れが定着したということです。「参加者には、こういう体験を通して最終的に得た知識とか、そういったものを実生活の中で活かしていける人になってほしいな」というふうに思って、活動を進めています。

NPO法人大山千枚田保存会 事務局 浅田 大輔 氏

最初は私たちも10年ぐらい農地の保全と地域の活性というテーマで、大山千枚田保存会というものを立ち上げました。こういう棚田を維持するのに、農家の人の力だけでは大変ですので、都会の人の力を借りながら、棚田のオーナー制度というものをやりながら保全活動を行っております。

千枚田の概要ですけども、千葉県で一番高い山で愛宕山というのがあるんですけども、そのふもとに広がっている棚田です。千葉県で一番高い山は何メートルか、皆さんご存じですか。408メートルしかございません。そのふもとに広がっている棚田で、面積は全部で3.2ヘクタールの田んぼとなっております。375枚の田んぼがありまして、標高も千葉県は低いので、そんなに水とか出ないんですね。この地域は地滑り地域ということで、ため池も造れませんので、川もすごい下のほうにしかありませんので、山道だけでこういう棚田を造って管理しております。土坡(どは)の棚田という、畔(あぜ)の棚田になっています。

千枚田はどんな教育ファームの取り組みをやったかということなんですけども、まず栽培作物についてですけど、ご覧のとおり、お米、大豆、あと綿と藍を育てております。基本的に大山千枚田は粘土質がとても強い土質ですので、基本的にはほとんど米しか作れないような場所で、ほかの畑のものは作れないですけども、野菜はあまり作っておりません。大豆は割と休耕地でも割と育ちますので、大豆を作っております。

綿と藍は、こちらはオーナー制度みたいな感じで、遊休農地の活用の中で、綿藍トラストというのをやっているんですけど、その一環で子どもたちに自分たちで藍を収穫してもらって、葉っぱから色素を取ってもらったり、下のほうにある綿の葉ですけども、綿から糸を紡いでもらって作品を作ってもらって、できた作品を藍染めするというかたちでやっております。大豆は先ほど栃木でもありましたけども、うちのほうでもおみそ作りですとか納豆作りのほうもやっております。一つは農家の中で昔の日本人が持っている、自分たちの生活に必要なものは自然のものから作ってきた技術をもう一回見直し、それを伝えたいということから、こういうこともやっております。

作物以外ですけども、見てのとおり生物がいたり、周りの森なんかもあって、教育ファームの教材というのは、どこでもそうだと思いますけども、中山間地域とか農村とかに広がっている環境全部が教育ファームの素材になるんじゃないかなと思っております。もちろん先生は地域の農家に先生になっていただいて、いろんな活動を行っております。

「取り組んだプログラム」ということですが、まず稲作体験ということで、田植から稲刈り、中の草刈りなんかも、年間を通してやった学校もありますし、単発で行ったような学校もあります。下の写真はもみ殻かまどなんですけども、もみ殻を使って、お米とか稲は捨てるどころがどこもないよという、お米の部分は食べるところで、残った部分なんかは燃料なんかに使えるよということを伝えようと思って、もみ殻かまどというのをやっております。かまどの所、女の子の顔を見てるとすごく嬉しそうな感じで、テンション上がりながらご飯を食べているんですけども、こんなこともやっております。

左上の写真は祭りずしと言いまして、千葉県南房総の地域では伝統食材というか、太巻きなんですけども、太巻きを切るといろんな模様が出てくるという、そういうのなんかも子どもたちの体験でやっております。

それ以外の体験ですと、今説明させていただきましたが、藍染体験という、葉っぱを収穫してもらって、畑も片付けなんかもやってもらうんですけども、収穫をしてきて藍染をやったり、わら細工は伝統文化というのがありますし、先ほども申しましたとおり、昔の農家はわらを使っているいろんなことをやったんだよというのを伝えたいなというところで、わら細工の体験なんかも行っております。

やっぱり子どもたちが一番テンションが上がるというか、楽しそうにやってるのは、田んぼの生き物の調査かなと思います。やっぱり農業の面白さを伝えるには、お米も大事ですけど、こういう生物なども通してやると、幅が広がるんじゃないかなと思っております。里山を使ってこういう森遊びなんかも、間伐なんかも一緒なんですけど、こういう体験なんかもやっております。

最後ですけども、子どもたちの目の色が変われば大人も変わるということで、こういう農村地域というと、子どもたちはすごく楽しそうなんですけども、いつも普段まず子どもたちに言ってるのは、農村てすごいだろうということを言っています。まずこういう農業体験をやってもらって、お米のすごさとかを知ってもらいながら、なおかつお米のおいしさも伝えていく。「お米を作った所にはこういうすごい生物もいっぱいいるんだよ」なんて言うと、みんな結構「僕たちも農家やりたい」とかって言うんですけども、そんなことをやっています。

あとは大人たちも、普段子どもが少ないですので、こういう体験をやりながら先生になつてもらおうと、楽しそうにやっています。ちなみに真ん中の方はロープで、このおじさんなんですけども、ターザンロープを作ったら自分が楽しくなってしまって、自分がやってしまっ

たという。こういうふうにも子どもたちと一緒に、スタッフのほうも一緒にこういう教育ファームをやりながら、農村の楽しさとかを再認識できるというのが、この事業だったのではないかなと思っています。

イオンリテール株式会社関東カンパニー 総務部

環境社会貢献・お客さまサービスグループ 増田 太郎 氏

最初に、私たちがなぜ教育ファームに取り組むのかということについて、お話をさせていただきます。

皆様ご存じのとおり、私どもイオンリテール株式会社はジャスコを運営している会社でございます。ジャスコに行けばいろいろな食料品があります。野菜もありますし、お肉もあります。消費者であるお客さまにとってみれば、ジャスコに限らずスーパーに行けば食料品が買える、お金を出せば食料品が買える。これはとても当たり前のことになっていると思います。それはわたしも同じことです。

ですが、そのジャスコにあります商品一つを取ってみても、その背景には生産者の方のいろいろな仕事があって、お店で働いている人たちのいろいろな仕事があって、そういうものを経てジャスコの店頭で並んでいるんです。わたしたちは一連のそれを知っています。イオンとして食育活動に取り組む。これは食を大切にすることをお客様に知っていただきたい。お店で売っている一つ一つを大切にしていきたい。そういう願いを込めて、わたしたちは教育ファームに取り組んでいます。私たちは、この取組をCSR活動の一環として位置付けています。

次に、取り組みの概要についてお話しいたします。こちらはお手元に資料を3枚配付しております。こちらをご覧いただければ大体のことがわかるかと思っておりますので、詳細の説明は省略をさせていただきます。

私たちの取り組みには一つ特徴があります。それはジャスコにおける販売体験ということです。この3回の会場で実施をしているんですけども、すべてにおいてジャスコで販売体験を子どもたちが実施しています。これがどういうものかと言いますと、まず収穫した農作物について選果を行います。それが本当に売れるのかどうか、まず子どもたちが選果を行います。そして次にそれをコンテナに詰め込みます。そしてコンテナに詰め込んだものは、農家の皆様にご協力いただいてお店に運ぶんですけども、そこで今度は従業員の指導の下、子どもたちが実際に陳列を行います。そしてその後にPOPを作ります。

POPというのは、値段が書いてあったり、こういう品物ですよということを説明するチラシみたいなものなんですけど、それを子どもたちが手書きで作ります。そして最後にお店に出るときには、あいさつの練習をしてからお店に出ます。こういった簡単ではありませんけども、お店の仕事も体験してもらっています。これは私どもの一つの特徴かと思っています。取り組み内容も増えました。

次に、今年、企画する上での留意事項です。これは3点ございます。まず一つ目は取り組み回数の増加です。昨年の2008年度は播種と収穫の二つの取り組みだけでした。イベント性が強かったという反省点がありまして、今年はそこから取り組み回数を増やしました。

二つ目が、イベントから体験と学習への変化ということです。これは子どもたちが実際にやることを通して、体験をすることを重視したということです。作物を生産する過程ではいろいろな作業が発生しますけれども、生産者や事務局であるわたしたちが代行するのではなく、実際に子どもたちが準備段階から最後の後片付けまで子どもたちがやると。そういういろいろなことを体験する中で、何かを子どもたちに感じてほしい。農作業って大変なんだとか、楽しいんだとか、そういったことを体験の中から感じてほしいということを期待しました。

最後に3点目、振り返りの実施です。やりっぱなしではなくて、子どもたちにとっては、自分たちの感じたことを言葉にして表すということが、一つ大事なことなのかなと考えています。ことしは壁新聞の作成を行いました。この作成に当たる指導については、ちょっと反省する点もあるかとわたしは感じております。

次に印象に残っていることです。わたしが取り組んだ中で一番印象に残っているのは、やはり子どもたちの表情ということなんです。これはトラクターに乗っている子ども。嬉しそうな顔をしているんですけども。あと農家さんの話を真剣に聞いている表情。あとこれも楽しそうな嬉しそうな収穫の喜びの表情とか、これは販売体験のときの楽しそうな表情ですね。あと作業に真剣に取り組んでいる表情。先ほども言いましたけれども、子どもたちは本当に正直だと思うんです。実際に自分たちが感じたことがそのまま表情に出てしまうのかなと。いろいろな顔を見せてくれたということは、やっぱりそれだけいろいろな体験をする中で、感じてくれたこともあったのかなと、わたしは思っています。

次に成果についてです。実際にわたしが、子どもたちがこんなふうに変ったということをお話することはちょっと難しいんですけども、保護者の方ですとか参加者の方から頂いた意見の中には、嫌いな野菜を食べるとか、生で野菜を食べられるようになったとい

うような、子どもの変化に関することができました。やはり自分たちで作ったりする、体験するということは、極めて重要なことなんだと改めて感じています。

最後に来年度の取り組みについてですが、来年は上期は埼玉県吉川市で実施をする予定であります。またいろいろとご指導などをいただければと思っています。

大野中公民館 畑で育てよう地域の輪 実行委員会 園部 裕美子 氏

私は神奈川県相模原市立大野中公民館の職員で、この「畑で育てよう地域の輪」実行委員会を担当しています。私の資料は、畑に取り組んでいる子どもたちと、その地域の大人の人たちが実際に書いた文章ですので、思いが一番伝わるかなと思ひまして、この資料を選びました。

わたしたちの活動は昨年の4月から始まっています、教育ファームも1年目です。使っている畑の場所は、隣りの大野小学校の畑です。この資料の左上の写真が実際に使っている畑なのですが、左側のちょっと石垣みたいな所がプールで、右側が隣地との境のフェンスになってまして、本当に狭い場所で、子ども約30人と地域の有志の大人7名でやっています。地域の大人7名といっても、その中で農作業の指導ができる方は2名で、それ以外の方は初めてこのような体験をするという大人の方たちです。

わたしたちの活動の目的というのは、この一つの畑を通して作物の成長過程を観察したり、農や食について考えるきっかけにするということも大事にしているんですが、公民館の主催事業ということですので、地域の大人と子どもがこの畑の作業を通してコミュニケーションを図っていくというところを重点に置いています。

活動日は毎週金曜日の昼休み、約20分間の時間で行ってまして、20分間という時間の中では伝えられることというのはとても少ないんですが、その短い時間の中でも、子どもたちと大人がどういうふうにかかわっていくか、農作業の楽しさだとか大変さだとか、あとコミュニケーションを図れるかということ、学校の先生と一緒に考えながら活動をしています。

活動をしている場所が学校の中ということですので、学校の協力もとても得られやすいですし、活動の安全面も特に心配ありません。毎週金曜日という活動は、大人の方はとても忙しい方ばかりですので、出てくるのも大変なんですが、それでも子どもたちの笑顔を見るのを楽しみにしているということで、毎回大体皆さん出席されて、活動のほうに参加していただいています。

今まで育てた野菜は、この狭い畑の中なんですけど、結構種類がありまして、ミニトマト・トマト・ナス・キュウリ・オクラ・コマツナ・カブ・ハウレンソウ・ブロッコリー・カボチャ・サツマイモなど、いろいろあります。ただ、狭いので一つの作物につき 4 株とか 5 株とかそれくらいずつ、ちょっとずつですが植えて、どんな葉っぱの形をしているのかとか、どんな花が咲くのかとか、いろんなことを観察しながら活動をしています。

その中で失敗した作物もありまして、カボチャとかサツマイモなどはちゃんとできなくて、それもどうしてできなかったのかということ子どもたちと一緒に考えながら、もともと 10 年間ぐらい使われてない所を畑にしているので、やっぱり土の栄養が足りないということと、石がとてもゴロゴロしているので、そのへんが作物に影響を与えてるということなんだねというところを反省しまして、今ちょうど冬の時期ですので、土づくりを重点的に考えながら活動をしています。

それから夏休みの活動なんですけど、夏休みの間も子どもたちに当番制で学校に来てもらって、毎日水やりをしてもらいました。今、学校というのは、子どもが委員会活動などで一人で学校に入るということではできないということですので、子どもが学校に水やりに来る際は保護者の方と必ず来てねということで、保護者の協力も得て活動をしました。夏休みに収穫体験を含めた調理実習も行いまして、子どもたちとその親も一緒に参加してもらって、この活動の理解を深めることもしました。

11 月には、段ボールで生ごみを堆肥化する装置を作りまして、その講習会も親子を対象にして開きました。段ボールで作る堆肥化の装置というのは、大体 2、3 カ月で 1 サイクルですので、11 月から始まって今ちょうど 2 カ月ぐらいですので、各家庭で作ってくれたその生ごみの堆肥のものも今畑に入れて土づくりを行っています。最近では自主的に草むしりをする子どもが出てきたり、図書館で野菜のことを調べている子どももいるということ、学校の先生から報告を受けて、とてもわたしたちの活動の励みになっています。

北杜食育・地産地消推進協議会 事務局 浅川 裕介 氏

北杜市は、ミネラルウォーターの生産量、日照時間が日本一であり、全国の約 3 分の 1 の生産量を占めるほど豊かな水資源と日照時間は年間 2,600 時間を超える自然環境に恵まれた地域です。

また、名水百選は、自治体で唯一 3 つ認定を受けた地域でもあります。

そんな私たちの地域では、2 年前から「 ” 食と農 ” の健康な杜づくりプロジェクト」と題

し、「次世代を担う子供達のため」をコンセプトに、人は生まれ育った環境と密接な関係にあり、その環境からとれたものを食べることが最も体によいとされる「身土不二」を重んじた食育・地産地消のプロジェクトを進めています。

このプロジェクトを立ち上げる背景としては、10年後、20年後の北杜市を考えたとき、今、「食」や「農」を核とした地域づくりをしなければ、輝かしい北杜市の構築はできないと考えたからです。

それは、「食」や「農」を取り巻く環境が、激変してしまったということです。これは、全国他の自治体においても共通した問題だと思います。

具体的に例をあげると、農業者の高齢化、担い手不足、そして、耕作放棄地の増加という問題があります。「農業は儲からない」ということから後継者は、他産業に流出し、悪循環を断ち切ることはできません。

他方、食生活の方を見れば、食生活の欧米化、食環境の乱れ、生活習慣病の増加、個食とか欠食という問題があります。社会的な購買力の低下が「安ければよい」という消費者の流れに拍車をかけています。

これらの問題は、これまで密接な関係にあった「食」と「農」が、循環環境が崩壊してしまったことが原因の一つであることを考えています。

今こそ、食や農を取り巻く問題を見つめ、持続ある地域社会を形成するために、食育・地産地消は必要不可欠であり、ただ、単に食事バランスだけを伝えるだけの食育とか、地域農業を守るための地産地消とかだけでなく、地球規模で考えた地産地消の大切さを、食育を通じて地域に推し進めることが大切であると思っています。

今回の「教育ファーム」の取り組みについてですが、私たちは「教育ファーム」からどのようなことを子供たちに伝えるか、どのような子どもたちを育成していくかということを中心に考えて、北杜市の将来像である人と自然と文化が躍動する「環境創造都市」から、人・自然・文化に着目し、三つのキーワードを軸に「教育ファーム」を展開しています。

まず、「人」に関しては、人と人のふれあい、「絆」づくりを大切にしています。それは、核家族化が進むなか、世代を超えた触れ合いなどが少なくなっているからです。「教育ファーム」を通じて、生産者・消費者の触れ合い、親子の触れ合い、おじいちゃん・おばあちゃんとの世代を超えた触れ合いなど、そういった触れ合いから、人と人との「絆」というものを伝えていきたいと考えています。

二つ目の「自然」については、さまざまな「自然」に触れ合うことから、自然の力に感

謝し、自然を大切に思う心を持つ子どもたちを養っていきたいと考えています。

三つ目の「文化」では、農業は文化のつながりが非常に深いもので、文化・歴史とのふれあいを通じて、北杜市をもっと好きになってもらい、郷土に対する愛を深めてもらうということを、この「教育ファーム」を通じて、子どもたちに伝えられないだろうかと思っています。

これらの取り組みの一部になりますがご紹介いたします。

「人」ということに関しては、今年度「子ども市場」の取り組みを行いました。子供たちが作った野菜を、県が主催する農業祭りの1ブースを借りて、実際に販売してもらい、生産から流通そして販売、そこの苦勞を子供たちに知ってもらおうと考えました。

次に「自然」に関する取組としては、どこの団体においても大好評である生き物調査を行いました。この取り組みは、子どもたちが非常に興味を示す取り組みです。また、北杜市では、これにプラスアルファして、名水を守るために里山整備事業というものを積極的に行っていることから、その間伐材を使った箸作りを行っています。この箸づくりからは、日本が割り箸を年間250億膳も使っており、そのうちの97パーセントが輸入されていることを理解し、身近な生活習慣から少しでも自然に優しい生活を考えることや、山を整備し山が元気でなければ、名水の里を守れないということ子どもたちに伝えることが出来ればと考えています。

最後に「文化」に関しては、表紙にもありますが「どろんこ相撲」の「相撲」と「稲作」の文化の関わりであったり、正月の餅つきと鏡もちづくりを行う風習、「かかし作り」は、その当時の人たちがどのような考えでつくったのかなどを「教育ファーム」を通じて子どもたちに伝えていければと考えています。

「教育ファーム」の可能性は非常に大きく、学校給食であったり、料理まで含めてという取り組みのお話もありましたが、北杜市では、「キッズキッチン」を教育ファームの一環で展開したりもしています。

これからは、教育ファームという一つの取り組みが、さらに他の取り組みと繋がって、地域全体で絆の輪が構築できるだろうと思っています。先日、教育ファーム推進全国大会で取り上げていただいたのですが、来年度より食育・地産地消、食農教育を総合的に行う専門課「食と農の杜づくり課」を立ち上げ、条例の制定の予定もあるので、「教育ファーム」を重要事業として位置付けるなかで、学校給食などの市の関係でできるところだけではなく、地域を巻き込んだ食育・地産地消の展開をしたいと考えております。

最後に、人と自然と文化が躍動する「環境創造都市」として、単に田んぼや畑は、私たちが生きるために必要な場所だけではなく、また、北杜市が誇る水や太陽をはじめとする自然資源がなければ、あらゆる生き物は生きてゆけない。食育・地産地消を通じて、北杜市の豊かな自然を健康な状態で次世代に残すことが、今私たち「北杜市」の使命だと思っています。市民のために、県民のためにこれからも頑張っていきたいと考えております。

バジルクラブ 代表 鈴木 達也 氏

バジルクラブというのは、安曇野の松本平で、生産者と消費者の距離を縮める活動を行っています。その中で、わたしの住む町会の岳っ子クラブの教育ファームを、4年目になって、ことしはモデル事業の1団体としてメッセージ性のある活動を心掛けてきました。

一つは、すべての生き物はすべてのかけがえのない命があり、それを頂いてわたしたちの命をつなげている。さらにその命は循環していて、その輪が小さくて多様に絡み合っていればいるほど、豊かな環境であると言えるということを親子が感じてもらえるように、自然農法やアイガモ農法の体験を通して、特に「アイガモを育てるから食べるまで」を体験してもらおうということから、かわいい、暖かい、かわいそう、おいしいということを実感してもらって、その気持ちをわかってもらおうということをやっていました。最後に、みんなで感謝の気持ちを詩にしてもらって歌を作りました。

それでは簡単に活動を紹介させていただきます。これは畑、主に上のほうですが、混植を行って、トマトとバジルを混植してます。畝まわりは全部小麦をまいて草が生えにくいようにしています。中学生が中心になってスタッフとして働いています。子どもが話していますね。これはこの教育ファーム当日に、すべてのアイガモがキツネに食べられてしまったので、別の田んぼからアイガモを持ってきて、みんなで柵を張ってキツネが入らないように、電気柵を取り付けることをやりました。

季節が変わってだいぶ草が生えてきたので、草の手除草と、あと小さい子たちは虫取りですね、昆虫観察です。中学生がここでも頑張っていますが、時給 1.5 キロのアイガモ米が手に入るということで、張り切ってやってもらいました。このように多様性のある畑で、大豆、バジル、トマトも。トマトの畑なんですけど、いろいろな作物の中でこのように立派に育つということ、多様性の中に育つということを教えました。穫れた作物や、ほ場にいた生き物なんかを看板に描いてもらいました。こうやって最後、収穫したものをみんなに配って写真を撮りました。

今度は藍染めですが、今回は藍の生葉染めということで、藍をただ絞ってその場で絹に染み込ませるといことです。すごく手軽にできるということで、手まで染まる。タンパク質を染めるので手まで、特に爪を染めますので、3週間ぐらい落ちませんでした。これはその近くの川で色止めをしている。風にそよぐと、さっきの藍染めの方とちょっと色が違うのは、生葉染めは緑色、深緑に染まるということですね。

もう4年目となるお母さんたちが率先して稲刈りの準備をしています。2本のはざかけの棒を担いでお母さんもいます。

いよいよアイガモの時期ですが、アイガモはこの日集まったお父さんと中学生に体験してもらいました。本人が率先してやるということで、さすがに初めての経験で、ちょっとぼう然としています。農文協の職員の人たちも取材やお手伝いに来てくれて、もう先に中学生がどんどん教えてますね。こうなってしまうと、子どもももう大丈夫で、進んでみんなやっています。この指導しているのは、解体の免許を持ったおじさんです。興味津々の顔をしています。お父さんが裂き、お父さんと中学生がつぼ抜きということをしています。

教育ファームとは違いますが、このとき解体したアイガモを使って料理教室、近くの有名店の三つのレストランのシェフを3人呼んで料理教室をやりました。岳っ子ファームのお母さんも招待して一緒にやりました。ここにあるのがアイガモの食材です。行政官の方で熱心な方もいて、休みを取られまして、しっかり解体の方法を教わりました。お父さんがアイガモのくん製を作っています。食肉についていろいろと議論がありますけど、肉を食べるにしろ、こういうようなことがあるということは伝えたほうがいいんじゃないかと思っています。

おもちつきですね。ここでも中学生がもちをついています。あそこにあるのが、さっきくん製にしたアイガモです。お坊さんと呼んで感謝のお説教を聞きました。感謝祭の前の座禅です。みんなしっかり感謝しているとお坊さんも褒めてました。りんとしていますね。これがアイガモのくん製と、このとき取れた野菜のサラダです。この間の教育ファーム推進全国大会で、「ありがとうあいがも2009」を歌ってきました。

以上ざっと紹介しましたが、食育の本流はやはり学校教育にあるというのは、何といても給食がありますから。けれども放課後の遊びや寄り道、いたずらなどからも大切なことが学べると思います。私もそうでした。バジルクラブの食育は、食べ物だけでなく気持ちも循環するような、いたずらを続けていけたらいいなと思っています。

NPO法人 富士川っ子の会 理事長 柚木 恵美子 氏

「地域で取り組む子育て のびのび食育『富士川っ子』」の事例発表をさせていただきます。日本三大急流と言われる富士川と、富士山を仰ぐ風光明媚な静岡県富士市からの発表です。

核家族化や少子化に加え、地域の連帯感の希薄化に伴い、家庭や地域の教育力の低下が危惧されています。子どもたちの健全なる成長を願い、豊かな自然環境や安心して遊べる場所、それから地域の中で培われるさまざまな年代層での人間関係、そして地域固有の伝統や文化・歴史を次世代につないでいく環境づくりをしていこうと、平成14年11月、現在のNPO法人富士川っ子の会の前身である「富士川っ子が育つ会」を設立いたしました。

活動理念は「自然と生きる」。環境学習を視野に入れた農業体験をメイン事業とした食農・食育活動を実践しています。活動を通し、知識や情報、資料収集、提供などを行います。会員相互の親睦を深めるとともに、地域の諸団体との連携や協働を通し、地域づくり、地域のきずなを深めています。活動の継続を考え、平成20年2月、NPO法人として発足し、「NPO法人富士川っ子の会」と名を改めました。

現在、会員は38人です。協力者は地域の活動団体、近隣の農家、富士市農政課、(元富士川町は平成20年11月、富士市と合併し、今は富士市となりました。)それから地元の小学校です。

活動は毎月1回、富士川っ子エコクラブ農園での食農、収穫したものを調理して食べる食育活動です。富士川第一小学校1年生を対象にしたさつまいもプロジェクトも、土づくりから苗差し、草取り、つる遊び、焼いも大会などを実施し、3年目となりました。1月23日の土曜日に行われた一小フェスタでは、子どもたちからすてきなお礼のメッセージが届きました。また、皆様のお手元に届けました「のびのびニュース」秋号ですが、これは富士川っ子エコクラブで活動終了後、子どもたちは振り返りということで、日誌を書いています。その中からピックアップしたものを、子どもたちの言葉として「のびのびニュース」で伝えています。

富士川っ子エコクラブ農園です。農園活動のようすです。子どもとその親、スタッフ、指導員、助っ人が、このフィールドで土づくりから畑の手入れ、収穫して食べてみる食農・食育事業を展開しております。そば打ち、もちつきは、農園で収穫したそば粉やもち米を利用し、日本の食文化を継承しています。

平成14年設立当初は、地域で環境をテーマに活動している5団体と有志でスタートし

た「富士川っ子が育つ会」は7年が経過し、ネットワークもぐんと広がりました。民間、企業、行政、学校、地域社会協働による人づくり活動の輪が拡大しております。

今後の目標と展望です。NPO法人富士川っ子の会は、食農・食育による人づくり活動を実施しています。継続こそ力。そのための今後の目標として、家族が楽しく参加できる仕掛けづくり、また子どもの自立を促すための子どもによる企画と運営、中学生らジュニアリーダーの育成、それから地域の自然・歴史・文化の学習、地域内外の協働、そして足腰の強いNPO活動を目指しています。

(3) 意見交換

蕪木：それではしばらくの間、進行を務めさせていただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

今日はこれから「教育ファームを広げるために」ということでお話しいただくわけですが、せっかく各地から集まっていたわけですから、皆さん自身がこの会で、何かやはり活動に資するようなものをお土産に持って帰っていただくことが大事なのではないかと思っております。そこで教育ファームを推進し、これからの発展につなげるということで、まずは皆様方の実践の中で、これはやって非常によかった、あるいはこれは面白かった、あるいは非常に喜ばれたと、そういったことをご披露いただいて、それぞれ規模や場所は違いますけども、こんなことが非常に有効じゃないかということがありましたら、まずはどなたでも結構なんですけど、ご披露いただければありがたいと思いますが、いかがでしょうか。こちらからもどんどんお名前を出させていただきますけど、よろしく願いしたいと思います。こんな取り組みをやって面白い、こんなことをやって子どもに喜ばれた、そんなことが何かありましたら、よろしく願いします。

まずイオンの増田さん、何かこんなのをやってすごく喜ばれたとか、これ面白かったとか、販売体験もなさっていたというお話を聞きましたけども、何かそのへんからお話があったらお願いします。

増田：そうですね、やはり私たちとしては、販売体験ということかなと思います。最初に子どもたち、お店に立って並ぶのですけれども、お店に出る瞬間から、それまではすごく元気なんですよ、でも出る瞬間に緊張してしまうんですね。だけれども、お店に立ってみんなで声を出すんですね、大きい声を。最初は出ないんですけど、僕らも応援しながら出しているうちに、参加者の子どもたちもだんだん大きい声を出すようになるんです。最

後はもうほんとに自分たちで、「僕たちが取った野菜なんですよ」と、野菜を持ち上げてお客さまにアピールするようになるんです。だから最終的に見ていると、**子どもたちも販売自体を楽しんでいるのかな**と思うんですね。

それと子どもたちの声なんですけども、自分たちが育てた野菜を買ってくれたことは本当に嬉しいというようなことも言っていますので、やっぱり販売というのは一つの取り組みなのかなと、私は思います。

蕪木：ありがとうございました。まだまだ皆様の他の所では、販売までやっている所は少ないのではないかと思います。他にありますか。収穫物の販売までやっている所はありますか。だんだんこれから増えていくのではないかと思います。どうぞ、富士川っ子の柚木さん、何かありましたら、どんなことでもお話しただけですか。

柚木：わたしたちは発足当初、東名の富士川サービスエリアの富士川楽座と連携しております。東名の富士川サービスエリアのふれあい広場では、地元の農家の方が野菜を販売しております。エコクラブ農園でグリーンピースなどの野菜が取れすぎたときに、子どもと一緒に、露天ですけれども、販売体験もしました。

蕪木：その効果はどうですか。

柚木：子どもたちが、**自分たちが作ったものが商品になる**っていうことに目覚めて、それはすごいです。もう一生懸命売り子になって声を張り上げ、あっという間に売れてしまいました。

蕪木：売れますね。子どもさんが売っていると買い手も。

柚木：サービスエリアは購買力がすごく多いので、販売も楽しいです。

蕪木：中学校などへ、小学校もそうなのですが、訪ねまして、文化祭のときに販売させるとか、そのようなことをやっている学校はありますけども、ゆくゆくは、やはりそういうところまで規模が大きくなると考えて取り組んでいくことも必要であると思います。やはり農業も流通の中に取り組みされており、それを子どもたちが体験するというのもいい勉強になるのではないかと思います。

他に何か違う取り組みで、こんな取り組みをやったらすごく良かったと、効果があったというようなことは何かございますか。大山千枚田の浅田さん、非常に何かいろんな取り組みをなさっているようなお話を伺いましたけど、どうでしょうか。

浅田：そうですね、観察会はやはり生物を通して、学校ビオトープに全く興味がない子どもたちばかりなんですけども、体験に来て生物に興味を持って、学校ビオトープ、ほと

んど前は行かなかったんですけども、だんだんと体験から帰ってから、学校ビオトープに行って地元の地域の生物というか、学校の生物に興味を持ったという声を先生方からいただきました。

蕪木：そうですか。それは千枚田じゃなくて、学校の中にビオトープがあるのですか。

浅田：そうです。体験の打ち合わせとか行うときに、うちに学校ビオトープがあつてというお話がありました。全然荒れてしまっているし、子どもたちも興味がなく、今ちょっと薄れちゃってるんですよという話から、じゃ終わった後に棚田だけじゃない、自分たちの地域の生物にもちょっと目を向けてみるような話をしながら、そっちのほうにも移行できるような話をしてみますというところから、いろいろとその体験の中で考えてやってたんですが、うまく行ったと思います。

蕪木：学校にそういうフィールドがあつたのですね。

浅田：そうです、砂場とかを変えていきました。

蕪木：変えて。ああ、そうですか。

浅田：あとはプールでのトンボの救出作戦とかヤゴ、ありますけども、そういうのに興味を持ってもらえたというのがあります。

蕪木：生き物へのですね。

浅田：あともう一つは、やはりこういう農業体験で、実際学校ではあまり発言しない子たちとか、そういうおとなしいと思っていた子たちが、フィールドにでると、すごく声が出てきて、こんな活発な意見が出せるの、先生たちが逆に驚いているという声はよく聞いています。

蕪木：座学では見られない子どもの姿がですね。はい、ありがとうございました。他に何かございますか。どうぞ手を挙げてください。こちらから指すのもちょっと失礼なんですけども。バジルクラブの鈴木さん、何かアイガモでやって、それを食べるというのすごいなと思いました。

鈴木：アイガモ農法というのは徐々に広まっていると思うのですが、一番のネックというのは、その最後のアイガモの処理というか、非常に優れた食材なんですけれども、これを加工・販売する流通がいまひとつ整ってないということで、一番いいのは自分たちで食べるという、食育などに使って、それを食べるということが、わたしは一番いいかなと思うのですね。豚とか牛とかはいろいろな法律で難しいのですが、アイガモはまだ法律の面で自分で解体もできますし、温かさとかかわいさから、かわいそう、最後はおいしいとい

うところまで、すべてを兼ね備えた教材だと思っています。

蕪木：そうですね、すごいですね。子どもたちもだいぶショックを受けるだろうけども、それを食べるということがどういう意味かというのを、やっぱり実感させる事業じゃないかなと思います。

他に何かございますか。古谷さん、何かオリザネットの取り組みの中で、こんなことがよかったというのは何かございますか。

古谷：オリザネットは生き物調査を毎回行っています。それでこの間行ったのが田おこしです。万能（まんのう）で、みんなで一生懸命やるんですけど、それは田おこしの労働の大変さを知るといっても、田おこしすると、乾燥した都市近郊のカラカラの土の中からもドジョウが出てきたりとか、田んぼに水があるときに泳いでいた水生昆虫のガムシとか出てくるんですね。そういうのを農作業を通して発見する。そうすると、いろんな別の所で田おこしをしている耕運機の裏に、いろんなサギとかカラスが来て何かやっているという理由もわかるようになる。**農作業と生き物とのかかわりを知るって意味では、田おこしという作業は結構面白い。**なかなか行っていないことですが、それも面白かったですね。

蕪木：それは面白いですね。子どもたちの発見につながりますね。ありがとうございました。

ふれあいふぁ～むの栗田さん、冬にどう工夫するかというのが一つの課題だったように、前お聞きしたんですけど、どうでしょうか。

栗田：一番は生産者が直接指導を行っているというのがわたしたちの特徴でもあるので、農業青年クラブの20人余りの**若い農業青年が、家族を対象にして指導**をしているということで、一番自分たちの中で喜ばれたのは、若い青年なので楽しく農業が教われたというのが親御さんからの意見で、子どもたちからも、お兄ちゃんお姉ちゃんと一緒に遊べて楽しかったよ、という話をもらえたのが一番よかったかなと思います。

あとは特にフィーバーしたのは、自分たちで育てたスイカがボンボンできちゃって、それを最後に、一人1個ずつスイカを割らせたんですよ。それで本当にこんな一人1個スイカ割って食べさせてもらえるような経験はまずないから、そういうところがすごく喜ばれました。

本当は冬もやってみたいんですけども、ちょっと生産者が牛を飼ってたりだとか、このふれあいふぁ～むの事業自体も要点を押さえながら、例えば**コンニャク屋**だったりとか豆

腐屋だったりとかする人たちが子どもに教えたりとか、そういうのもあるんで、生産者も勉強で、一緒になって子どもたちや親御さんにこういうことを教えていこうということを、いろいろ会議なんかで考えながらやっていました。冬場は農業者の皆さん本当に忙しいんです。冬場も忙しくなければ、何とか手を出せればいいかなと思っています。

蕪木：冬はお忙しいですか。

栗田：そうですね、私の地区はほとんどが促成栽培を行ったりとか、あとは豚はともかく、牛は秋から冬にかけてはわら上げの時期だったりとか、そういったことで、コンニャク屋はコンニャクイモ、秋冬にかけて、本当の収穫が迫ってくるんで動けないということがあります。そういう欠点があったもので、夏に夏野菜ということで収穫してきたので、冬にどうやってうまくやっていくかというのが、今後の課題ですね。

蕪木：普通は、冬は案外、来てもらっても何もやることないのだというファームが多いのですけれども、そちらはむしろ忙しくて、手を出せないという感じですか。

栗田：そうですね。なかなか、冬場にもできればやりたいのもあるのですけれど。

蕪木：何か冬とかそのあたりに工夫なさっている団体はありますか。なかなか難しいですかね。

夢ひたちの梶山さん、何かピザをお作りになってということで、お話がありましたけど、どうでしょうか。

梶山：はい。ピザを作っていることと、その前に今、冬っていう話がありましたね。この間の1月20日に、教育ファームの活動にまで入れなかったものがありまして、地獄納豆を作っています。地獄納豆は土の中に埋めて作った納豆です。全国で優勝したぐらいの納豆屋さんが日立におられるので、その方に講師になっていただいて、私たちと先生で前準備から行い、わらを筒に使えるように準備をしました。先生がそれを持って帰り、自分の家で納豆を作っていただきいてそれらを埋めて、その次の活動日に、みんなには掘ってもらっただけを体験をしました。

それと同時に、みんなはもう一度わらから筒作りをして、消毒をして、大豆をふかして、筒に入れて、畑に行って埋めて、それが一日の活動だったんです。その日に自分たちが作った納豆は食べないけども、先生が作ってくれた納豆を昼間、新聞記者の方がちょうど取材に来たときに、その納豆の試食をみんなでしたんですけど、みんなお醤油をつけないで食べてもおいしかったとのことでした。

自分たちが作ったのはどうなのかということですが、次の日に皆さん活動日ではないけ

れども、納豆を持ちに来てくださって掘ったら、あまりよくできなかったのですね。それはなぜかという、温度とかそういうのがありますよね。私のほうの人たちはみんな、大体地獄納豆とかそういうのを作るときには、家で作るときには2日か3日ぐらい寝かすって言うんですよ。それを一日で実施したのだからできなかったということです。わたし自分自身のブログをやってるんですけど、その納豆の工程をずっと書いて、先生にできなかったっていう話をしたら、先生からブログの方に、もう一回挑戦しましょうという話が出ています。

そういうことで、大豆は自分たちで作った大豆じゃないんですけども、ピザなどは畑で作った食材を取ってきて、新しいものでピザを作るのですよね。タマネギは自分たちで収穫したもの、ジャガイモも収穫したものを保存しておきますよね。そういうものを使ってピザを作ると、子どもたちはあまり好きじゃない野菜であっても、一生懸命作って焼いて出来上がって、温かいうちに完成したのを食べると、もうみんな喜んで、すごいですね。だからいつもやる豚汁とかそういうものもやりますけども、変わった、子どもたちが好きなようなピザとか、あとはお好み焼きとか、そういうのを自分たちで作った野菜でやるのもいいのかなと思っています。

蕪木：嫌いな野菜も食べられるようになるかもしれないですからね。

梶山：はい、そうです。

蕪木：ああ、その工夫ですね。ほかに何かそういう取り組みで、こんな取り組み結構面白い……、はいどうぞ。富士川っ子の柚木さん。

柚木：富士川っ子は4月から開講式が始まりますが、本来は土づくりからスタートしたいのですけれども、4月には春野菜が植わっていて、そこができないのです。でも、冬になると今度は野菜がほとんど畑からいなくなります。順序は逆転しますが、畑の様子を見ながら、土づくりということで、天地替えをしたりし、1年を通して土作りから収穫までの流れを経験します。子どもたちに普段はなかなか指導できない農機具の使い方の指導などもやっております。いつもは耕運機で耕してしまうんですけども、子ども達はくわを使ったりするのが大好きです。大人のお父さんやお母さんもくわの使い方を知らないの、くわを持って前に進むんですね。ああ、わたしたちも最初はそんなだったと、面白いです。

あともう一つ、今まではサツマイモなどを作るときに苗を買って蔓刺しをしていたのですが、やはりそれじゃ本当のサイクルにならないということで、今年度はサツマイモのつるを育てることにしました。今年はおもち米も作ったものですから、わらがたくさんあるの

で、畑の隅に1メートル四方ぐらい掘り下げて、いも倉を作りました。

イモを入れて芽を出させるんです。まず、いも倉にもみ殻や落葉なども入れて、子どもたちに踏ませたりしながら、ボカシを入れるんですね。2ヶ月くらい経つと地熱でもみ殻や落葉、藁が発熱して温かくなります。2月になったら中の落ち葉やもみを全部取り出して畑に入れて耕し、いも倉には、今深く埋めて貯蔵してあるイモをいれ、芽を出させます。6月にはそのイモの芽をみんなで差します。1年間を通して活動することによって、土づくりから始まる畑のサイクルがわかるような、活動をしています。

わたしも初めて今回そのいも倉というのを知りました。

蕪木：それは面白いですね。

柚木：はい。結構楽しく、大人も夢中になっています。

蕪木：イモ掘りはするけどね、その後のつるの始末が大変ですね。

柚木：大変です。たくさんおイモが取れば取れるほどつるが多くて、始末が大変なんですよね。枝豆もそうなんですけど、食料にならない枝・葉・蔓などを畑に戻し、土づくりに還元していくというように、畑に1年間のサイクルをつくっていこうということで活動しております。

蕪木：ありがとうございました。いいお話で、皆さんのところでご参考になったんじゃないかと思います。

北杜市さんの浅川さん、市を挙げてなかなか市長さんも頑張っていらっしゃるようですが、何か取り組みで、こんなところが面白かったとか、役に立ったとか、あったら教えてください。

浅川：面白い取り組みなのかどうかわかりませんが、私たちとしては、保育園と小学校を二つに分けて行っています。今までも、北杜市の小中学校、保育園では、教育ファームなどの農業体験をしていなかったわけではないですが、みんなが同じ共通意識の中で目的を持ってやっていたかという疑問なところもあります。

今回の保育園の教育ファームに関しては、園内に畑を作りました。保育園で今まで体験していた所はどうしても園の外というところが多く、柵を越えらるとものすごく保育園の先生方は安全面に気を使うようです。

蕪木：安全面ですね。

浅川：そうですね。野菜は一日たっただけでも、ものすごい成長するものなので、園の外ですと、たぶんほとんどの子どもたちは触れ合うことができないだろうと思っています。

そこで、保育園の中に畑を設置し、園の先生と嫌いな野菜などを子どもから聞き出して、子供たちとその野菜等を作りました。おもしろいもので、**実際自分で作ってみれば、嫌いな食べ物はなくなってしまうので、そのへんは本当に効果があると思っています。**

小学校にかんしては、親子をセットにして体験を行っています。学校では農業体験を行っているところがほとんどなので、学校以外でできる「教育ファーム」は、**親にどう伝えるかということが一番大切なことだと考え、親子で体験できる仕組みをつくっています。**

子どもに伝えるふりをして親に伝えるんですけど、この他にも、市全体を対象として活動を行うことで、今までなかった他の地域との場として、**新しいコミュニティーが生まれることも魅力的な一面だと思っています。**

しかしながら、一般公募による体験ですと、市として見れば 4,000 人ぐらいいる子どもの中で、わずか 20 世帯ぐらいですから、そこをどう壊し、より多くのかたが参加できる仕組みをつくるか今苦労しているところです。

蕪木：なるほど。地域によってはそういった壁をどう取り除くか、こんな活動が一つのきっかけになるわけですけど、なかなかそんなに大々的にもまたできていないので、難しいところということですね。

神奈川の大野中公民館の園部さん、何かありましたら。先ほど何か段ボールの堆肥化づくりをなさっていると。

園部：そのかかわっている大人の方の中に、環境についてのサークルを立ち上げての方がいて、その方が中心になって、**段ボールの中に腐葉土と米ぬかを入れて、それで一応堆肥化の装置が出来上がって、毎日出る生ごみをその中に入れてもらって、よくかき混ぜてもらって、微生物が生ごみを分解してくれて、腐葉土が最終的には堆肥になってくれるというものなんですけど、ここ 2 カ月やってみて、各家庭でやってもらったのを今持ってきてもらってるんですけど、やっぱり各家庭によって出てくるものが全然違って、ただの生ごみになっちゃってるような堆肥もあったりして、すごく臭かったりするのもありますし、まだ全然堆肥になってない、まだ腐葉土が結構残ってるような堆肥もあったりして、各家庭でいろいろ試行錯誤してやったんだということがよくわかったのと、あと持ってきてもらった親御さんに、子どもたちのようすを聞くと、自分で自主的に毎日生ごみを入れてかき混ぜてたよという家もあれば、全然興味がなくなっちゃって、ほとんど私がやってきましたというような親御さんもいたりして、私たちの所は子ども対象でやってたんですけど、そういうイベントをやることによって親御さんも巻き込んで、一緒に広げることができた**

かなと、そういうふうな感想を持ちました。

蕪木：そうですか。やはり取り組み方によって各家庭でずいぶん違いますね。はいどうぞ、村上さん。

村上：食農団体さんは地域の皆さんにどうぞおいでくださいということで、子どもさんとか親御さんなど幅広く受け入れてくださっているのです、そのような受け入れ体制で行っておられると思うんですけれども、そういう所に来る皆さんは関心があると思います。そういう人たちの中で、どちらかという、食農に対して関心がない人たちをどうするかというのが課題かなというふうに思っています。

先ほど話題提供の中にもありましたように、学校へ入るのが難しいというお話がありましたね。学校に入れば、総合学習の時間ですとか、教科、例えば関連のある理科ですとか、家庭科ですとか、そのようなところと連携すれば、教育ファームに取り組む大切さを伝えられると思うんです。聞く話によると、一生懸命食農団体さんが総合学習の時間に入り込んでやっても、そのご熱心な先生が転勤されてしまうと、突然もうやめという話になってしまって、とても残念だというお話を聞きします。先生方に教育ファームの取り組みをどうやって理解していただけたらいいのか、こんなふうにしたら良かったよというような事例ですね、そういうのがあったら教えていただきたいんです。

蕪木：どうですか。学校と組まれているというか、学校に入っていらっしゃる団体さん、どうですか。いらっしゃいますか。どうぞ、金坂さん。

金坂：名草自然塾では学校との連携はしておりませんが、私は行政の職員でございます。足利市では学校との農業体験をしております。その中で、我々の方は学校と直接じゃなくて、農家さんというか、契約を結んで学校に入らせていただいているんです。今年度から予算の位置付けも、「農業体験」という文言を全部「教育ファーム」と切り換えて、市の中でアピールしていこうと思っています。特に、学校のカリキュラムに入れるというのが難しいときは、今8校実施してますけれども、3校ぐらいは学年部会さんの取り組みとして実施していただいております。

というのは、小学校3年生が地域のことを学ぶというその部分ですね、小学校5年生が農業について学ぶというカリキュラムが教育の課程にあるかと思えますけれども、そういった中で、PTAの方で、学年部会で実施することがなかなか見つからないということです。それから学校の校長先生も結構学年部会でレクリエーションを組みたがるんですが、レクリエーションでは困ると。やっぱり学習に何かつながることをして欲しいという要望を、

学年部会長さんに校長が伝えることがありまして、学年部会が主になってそういう農業の活動をしています。

だから切り口を学校に持っていくときに、先生からもさっきお話がありましたけども、必ずしも先生から入っていくじゃなくて、PTA とか学年部会から持っていくというのも一つの作戦なのかなと思います。そういうふうにしていったほうが、親も熱心に来ますし、先生も楽なんですよ、PTA が来るので。非常に引率も楽に来られるし、いろんな面でやっぱり保護者の力がプラスされるというのは、学校側も受け入れやすいというところはあるかと思います。参考です。

蕪木：いいお話をありがとうございました。やっぱり何かワンクッションがあるといいですね。なかなかストレートにいきますと、わたしもずいぶん中学校を主に回っていますが、校長先生が熱心な所はものすごくやっているのです。でもその校長先生が転勤してしまうと駄目になってしまったり、あるいは担当の先生が転勤すると駄目になることがあって、できるだけわたしは学校の校務分掌の中に、どなたが代わってもそういう係とか、あるいは委員会ですね、そういうものを立ち上げておいてほしいということはお話ししてきています。しかし、なかなかストレートだと、先生方の負担が大きくなってしまいますから、サポーター、応援団の方、PTA あたりがサポートしていただくということになると、先生方も非常に乗ってきていただけるような感じがいたしますね。

他に何かございますか。こんなかたちでやったらうまくいったというのは、よろしいですか。時間はあと 10 分か 15 分ぐらいで終わると思います。

では、ひと通りお話しいただいたんで、最後にこれからこんなことをと、夢でいいんですが語っていただければと思います。自由でいいんです、教育ファームをこんなふうにしていきたいなど、将来的に。今すぐじゃなくて。今すぐの課題はお書きいただいたものの中にいっぱい書いてありますけど、教育ファームをこうやって発展させたらいいな、うちはこんなふうを考えているというのが何かありましたら、夢を語っていただいて、その中でまた提案もありましたらお話しいただくということで、締めていきたいと思いますが、いかがでございましょうか。

ふれあいふぁ～むの栗田さん、こんなことをしたいなあということが何かありますか。

栗田：そうですね、一番の目的は、いま中山間部というんですかね、農業を知っている人も知らない人もいるというような状況の中で、自分たちが地元になにができるかというところが、一番の大きな課題になると思います。特に子どもたちにはわれわれ以外にも、やっ

ぱり先ほどおっしゃられていたように、教育委員会だとかが中心になって地元の農業委員会に呼び掛けて、農業委員会から認定農業者が田植えの体験、稲刈りの体験というのをしている小学校も、時代の流れというんですか、他もやっているからうちもやっているというような風潮が多いので、やっているだけなのかもわからないですけども、そういう風潮があるということは、とてもいいことだと思います。

あとはそういうところにどんどん、どんどん発展して行って、本当に**食の大切さ**というんですか、やっぱり**30代の小学校の子どもを持つ親御さん**というのは、どうしても金銭的にも精神的にも、食に対して余裕を持つ心が少ないというんですかね、50代、60代になってきて、初めて健康に対して食に気を使うという方が多いので、そういうところから自分たちが**意識改革**をしていければなと思います。

あとは自分の県についてなんですけれども、特に自分の住む市などに関しては、教育ファームについて知らなかったものを、自分たちで引っぱって、こういうのがあるのだから一緒にやっていくんだよということで、声を掛けてはいるんですけど、そういったところで自分たちからも、農業を子どもたちに体験してもらおうということがどれだけ大きいことなのかということと、あとはほかの地区の地元の農業青年たちも奮い立たせて、**みんな**で、**青年が子どもたちや親子に対して農業の楽しさを伝えたい**と、そういうところが一番の今の大きな目標かなと思っています。

蕪木：はい、ありがとうございました。オリザネットの古谷さん、何かこんなことをこれからというのはありますか。

古谷：いろんな教育ファームの方の学校なんかで、最近は生き物調査を取り入れてくれる所が増えてきているんですけど、やっぱり生き物調査をして、いろんな生き物がいたねというだけじゃなくて、やっぱり**農業と生き物とのかかわりに目を向けてほしい**と思うんです。例えばアマガエルだったら、田んぼの中干しまでの間に1カ月半ぐらいでオタマジャクシがカエルになる。それまでの水管理というのがアマガエルを育てているんだよ。育ったアマガエルは稲の害虫を食べてくれるんだよとか、そういった**農業と生き物のかかわり**ということを一歩一歩積み重ねて、地域の農業は地域の環境を育てているんだなと、具体的な事例を通してそういうのを実感できるようにしてもらえたらいいなと。ただいるんじゃないかと、これはお米作りで農作業とのかかわりで生き物が育まれている。だからわたしたちは**国産のお米を食べる意義**がある。それとつなげていってもらえれば、生き物調査はもっとよくなるんじゃないかなと思います。

蕪木：そうですか。ありがとうございました。千枚田の浅田さん、いかがでしょうか。

浅田：夢ですか。僕もオリザネットさんがおっしゃったように、一つはその地域の生態系ですね。農業と生物の関係を知ってもらって、地域の自然のことを伝える活動をしていきたいというのがありますし、伝えるだけではなくて、そこから**体験してくれた子どもたちが自主的に何か動けるように育ててもらおう**というか、成長してもらえよう活動というか、そういうのが一番大事なのかなと思っております。千枚田の場合、鴨川市内だけじゃなくて、県内のお子さんたちも来ますので、鴨川市というよりも、割と千葉県内でそういう**地域の自然を守るにはどうしたらいいか**というのを、自分たちで考えてもらえよう活動につながったらいいかなと思っております。

あと、ものすごく将来的な話ですけど、その**体験に来てくれた子どもたちの1割でも構わないので、農村に来てくれて、農業に従事してくれるのが一番大きい**かなと思います。そういうふうになるといいなと思って、頑張ってます。

蕪木：はい、ありがとうございました。イオンの増田さん、いかがですか。

増田：二つあるのかなと思うんですけども、まず一つは、**取り組み自体を子どもたちと一緒に**つくっていききたいなと思うんです。こっちが全部用意して、こういうことをやりましょうねというのではなくて、子どもたちのほうからも、こういうことをやりたいなというようなことを一緒に考えながらつくっていけるような取り組みにしたら、もっと面白くなるかなと思うんです。

それともう一個は、これは夢なんですけれども、わたしたちジャスコにチアーズクラブという、環境教育に取り組むエコクラブの活動があるんです。そのチアーズクラブでこういう教育ファームを、全店舗とは言いませんけれども、全店舗に近い規模で、**この教育ファームをお店の近くでできたら面白い**かなというふうにも考えています。

蕪木：ありがとうございました。面白いですね。じゃあ大野中さんの園部さん、何か夢はありますか。

園部：そうですね、近いところでは、今やってることというのが、野菜の成長を一から見るということが結構中心になってやっているんで、そこだけじゃなくて、**日本の食料問題**だとか、**世界の食料問題**とか、そういうところまで踏み込んで子どもたちに伝えられたらなということと、あともっと大きいところと言うと、今うちの畑はすごく狭いというがあるので、もっと広い畑で、今は小学生たちを対象にしてやっていますが、公民館区内という範囲があるのですが、その中に**大きな畑を作って、地域の人たちみんな**で野菜を

育てて、大野中公民館の館区内の人たちは、食と農について考えられる人達がたくさんいるというような、そんな地域になっていけばすてきだなと思っています。

蕪木：まずは、ほ場の確保も大きな問題ですね、はい。北杜の浅川さん。

浅川：私たちの夢は、10年20年後の北杜市の姿です。今教えている子どもたちが10年20年経てば親の世代になります。その時に北杜市産のもの、山梨県産のものを見たときに、それを価格で選ぶのではなく、農業体験等を思い出してもらい、自然と地元農産物に手が出るようにしたいと思います。逆に今親の世代の人は10年20年後、サラリーマンから引退している世代なので、今度は自分たちが孫のために、こういった事業の基盤となっていくことを期待しています。

推進していく上での課題は、教育ファーム推進全国大会のときにも、話をさせていただきましたが、この会場に来られている方たちは、興味があるからいいけれども、興味のない人たちをどう巻き込んでいくのかということが一番の問題でありと感じています。

参考までに、私が知ってる中でおもしろい取組をしているのは、福井県の小浜市だと思っています。僕も数カ月向こうの職員として働かせていただいたこともあるので、取り組み内容はわかっています。あと、愛媛の今治市は、北杜市の取り組みのきっかけになりましたが、今治市では、有機農業を柱に、子どもたちが、有機 JAS 指定を受けた学校農園を展開していたり、直売所が中心となり農業体験を展開していたりとかかなり面白いと思います。

蕪木：ありがとうございました。何かまたそういうところで、ネットで調べていただいてもいいのではないかと思いますけども。それではバジルの鈴木さん、何か更にこうしたいことがありますか。

鈴木：私の所は皆さんとちょっと視点が違うと思うんですが、音に注目して、それと教育ファームとをつなげたいと思っています。今年「ありがとうあいがも 2009」を作詞してもらって、作曲して歌ったわけですけど、バジルクラブのホームページでクリックすると出てきますから、是非聞いていただきたいのですが、その歌を作るのもいいのですけれども、逆に座禅で静寂という、それをして、静寂の中に何かを聴き取るとか、心を落ち着けるとか、そういうものを取り入れたいと思っています。

また、今度子ども会だけではなくて、区のほうからも是非というか、区を挙げて教育ファームをして欲しいという依頼がありましたので、お年寄りも仲間に入れて、お年寄りは昔から伝わる歌も知っているでしょうし、歌じゃなくても、語りを子どもにしてもらったりとか、子どもに声を掛けてあげるといこと、そういうことがすごく大事だなと思って、音

に注目して行きたいと思っています。

蕪木：ありがとうございます。この間わたしも歌を聞かせていただきました。音というのは感性を磨きますしね、それから静かさの価値とか、頬に当たる風の音とか木の葉の音とか、そういう季節季節の音に敏感になるというのはすごく素敵ですね。富士川っ子の柚木さん、どうぞお願いします。

柚木：わたしたちは人づくり・地域づくりということを目的に、教育ファームというフィールドを使って活動をしております。先ほども申し上げましたけれども、富士川楽座というサービスエリアにぜひ寄っていただければわかると思うんですけども、富士川の流れと富士山の素晴らしい景観が地域の誇りです。わたしたちは自分たちの地域の歴史や文化、環境を誇りを持って語る、そういう次の世代を育てていきたいと願い活動しています。子どもが育つだけではなくて、関わっている大人もその教育ファームというフィールドを通してともに育っていこうという生涯学習を推進し、活動の輪を大きく広げていきたいと思っています。

蕪木：はい、ありがとうございました。お子さんだけでなくということですね。わたしはよく言っているのですが、勤皇派じゃなくて世の中に親農派をつくろうと、もっともってですね。それが世直しにもなるのではないかと思うのです。

時間もきました、夢ひたちの梶山さん、何かありますか。

梶山：私たちの所は、教育ファーム以前に地域の活性化のための活動をしています。今年幼稚園がなくなりまして、統廃合されて違う所に行かなくちゃならないようになりました。小学校は複式学級で小学生が50人弱、中学生が30人弱の所なんですね。環境にいい所にいるんですけども、人口が減ったりしています。でも都会から来てる人たちが、ここは公害がなくっていいなって言って、ここに移り住みたいなと言う人たちもいるんですよ。

ですから教育ファーム、子どもたちにもものを育てること、生きることの大事さ、そういうものを知っていただきながら、この子たちが20年30年後に、もし食べ物がなくなる時代が来ても、きっと生き残れるような子どもたちになってもらいたいなという、そして親御さんにも一緒にものを育てる大事さを、親子でやってもらいたいなというような活動をしていきたいと思います。

蕪木：はい、ありがとうございました。時間がきましたのですが、最後に静岡県の上村さん、今日のお話で感想が何かございますでしょうか。

村上：今まで、こういった柚木さんの富士川っ子の会みたいな団体さんが、かなり県内の活動を熱心にやっていたらっしゃいます。どうやればそういう人たちが取り組みやすい、さらに活動を広げて行ってもらえるかなということ、この頃ずっと考えていました。この機会がちょうどいい機会なので、皆さんの活動のようすを聞いて、来年の活動にちょっと役立たせたいなと思って参加しました。本当にいい感じで、ありがとうございました。

蕪木：ありがとうございました。どうぞ。金坂さん。

金坂：先ほどから行政の立場として発言していないので、是非PRしておきたいと思えます。いろんな教育ファームの取り組みがあるかと思えますけれども、私ども、都市と農村の交流の中の一つとして教育ファームを取り上げておりますので、どうしても子ども中心の教育ファームという考え方になりますけれども、私どもは田植をしながら実際に老人ホームの方をお招きしまして、本当は見学してもらっただけでいるはずが、実際にはじっとしていらなくて、自分が昔やったというものを思い出しながら、参加をしていただいたりとか、そんな中でまたつながりが出てきてると思えます。

先ほどの冬場の話でも、シイタケなどをやってる山間地域ですので、私の方は皆さんと違って、連続で一つを作り上げているのではなくて、単発単発で作っていますので、そういったものでいろいろなものを交えながら行っています。田んぼに関心があるのですが、シイタケを作っている部分も見せたりしています。結構シイタケなどでも、30個菌を打ち込むとシイタケが30個しか出ないのですかとか、そういったことを聞かれます。そういう部分でも、あまり知らないんだなあというのを私たちも感じています。

あとは地域づくりの中で実施していますので、地域の方々が本当に生き生きしていて、アンケートを取った中でも、我々行政が実施してしまうと硬くて、10時から11時に田植を終了して、12時までにお昼を食べましょうとやってしまうのですけれども、農家の方が行くとファジーな形で行っていただいて、そういったところが温かみがあって、先生が話したように、語り合えるという部分で非常にいいというのが、アンケートの中でもかなり表れています。

今度は、先ほども言いましたけど、施設を造る中で、食育になかなか直接関心がない人をどうするかという部分も含めて、我々はどっちかというとツーリズムという考え方で言っているのですが、そういった個々のものでも、例えば親子、要するに小さいお子さんですね、未就学児のお母さんを平日にお呼びして、子育てサロンのなかに食育を入れていくとか、そういう農業体験を入れていくとか、行政の中で平日をどうやって活用するだと

か、平日にどうやって農業体験をさせるだとか、かなり言われますので、そういったものを入れていったり、今はやりでネイチャーフィットネスなんていうのがありますけども、自然の中でそういった健康的なものを考えながら活動していったりとか、そういったものを取り入れながら行っていきたいと思っています。

今日皆さんのお話を聞いて、皆さんのご苦勞をすごいなと思いながら、そういったものを参考にしながら行っていきたいと思っています。市の中でも、先ほど言いましたけども、農業体験という部分、どんどん教育ファームというものを打ち出しながらやっていきたいと思っています。先ほどのお話にも、ふれあいふぁ～むさんからありましたけど、やっぱり行政が理解がないと、なかなか進まないものだと思います。

最後に厳しいことを言いますが、この間も栃木農政事務所さんにも言わせていただいたんですが、やはり先頭を切って、農水省さんにPRをお願いしたいと思っています。教育ファームという言葉を作ったこと自体が農水省さんですので、地方公共団体としては、教育ファームという言葉が先行して、非常に取り組みづらくなっているのが正直なところなのです。教育というのが非常に全面に出ているので、何か農業体験と違うんじゃないかというとらえ方をしてしまうのですが、決してそうではないと。

先ほど、食育推進計画の話でも、私が知っている範囲では、教育ファームというものを位置付けてないと推進計画にならないのかなと思うんだけど、農業体験が入ってれば推進計画になるんだということをお聞きしたのですが、教育ファームという認識が自治体になんないんじゃないかなというのをすごく感じます。皆さんもおそらく地域に入っていく時にすごく感じるんだと思うんですけども、特にこの部分が、うちの県がどうかはわからないですけども、県もあまり認識がないんですね。農林水産省の通知でも県にこういうのをやるんだけど、相談するようにということになっているんですけども。

そういったことで、これからの農水省さんには、**教育ファームというものがどういうものかという周知**というのは、もちろん我々が活動で示していくことが一番大事であると思うんですけども、**もっとPRの部分ではお願いしたい**なと思います。概算要求で補助金を下ろした時にはがっかりした部分はあるんですけども、何か違う形の交付金で出てくるという話も聞いてます。

村上：環境とか教育などはお金にならないというようなことをよく聞きまして、教育ファームの団体さんで身銭を切って行っているというようなところもあると思います。そんなに多くののお金は要らないので、取組に対する謝礼などでいいと思います。うまく地

域振興に結び付いたり、お金のところで苦労しないような仕組みをつくっていくことが必要かなというふうに思っています。

蕪木：わかりました、はい。あとはやはり受益者負担ということをしていかないと、農家さんにおんぶに抱っこじゃ、やはりまずいですからね。そんなこともこれから、経費の面で自立できるような教育ファームになっていかなければいけないのかなと、私はそんなふうに考えております。それでは時間になりましたので、話がまとまりませんでしたけど、皆さんからのいいお話をいただきまして、何かお持ち帰りいただけるのではないかと思います。どうもありがとうございました。 (終了)



関東ブロック「教育ファーム意見交換会」の様子 (1月27日開催)